

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成25年4月30日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局 霊長類研究所

職 名 教授

氏 名 松 沢 哲 郎

助成の種類	平成24年度 ・ 国際交流助成		
事業名	京都大学ブータン友好プログラム		
実施期間	平成24年 4月 1日 ~ 平成25年 3月31日		
実施場所	ブータン王国内, 京都大学		
参加者	総数 30名	内 訳 京都大学側18名, ブータン王国側12名	
成果の概要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有(ヒマラヤ学誌 第14号)		
会計報告	事業に要した経費総額	14,804,190円	
	うち当財団からの助成額	3,000,000円	
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称) 全学経費(京大), 特別教育研究経費(文科省), 科研費特別推進研究・松沢24000001 (JSPS)	
	経費の内訳と助成金の使途について		
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
	渡航費	5,159,983	2,797,199
	招聘費	3,471,370	0
	人件費	5,764,177	0
	事務所経費	101,003	0
成果報告編集費	235,862	202,801	
事務連絡費	71,795	0	
合 計	14,804,190	3,000,000	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 平成25年度も引き続き、貴財団のご支援いただくことになりました。今後とも、どうぞよろしく お願いいたします。		

京都大学教育研究振興財団

平成 24 年度・国際交流助成

事業名：京都大学ブータン友好プログラム

京都大学ブータン友好プログラム (Kyoto University Bhutan Friendship Program、略称 KU-Bhutan) は、ブータン国を舞台に、京都大学固有の野外研究の伝統を踏まえた全学的な国際交流事業をおこなうことを目的としている。ブータンは、人口 70 万人のヒマラヤの小国である。最初の縁は、1957 年晩秋の桑原武夫教授らによる第 3 代王妃の歓待にあった。並存する部局独自の取り組みを束ね、日本で最もブータンと縁の深い大学として、ブータン王立大学ならびに保健省等と協力して、ブータンの国是である国民総幸福量 (GNH) をはじめ、健康、文化、安全、生態系、相互貢献の 5 つの側面から総合的な交流をおこなう。そのために必須な現地調査、交流データベース整備、映像・文書アーカイブ作製、HP からの発信、次世代を担う若手研究者の交流プログラム等を推進するものである。

役割は大別して 3 つある。①相互連携:各部局・各研究者がおこなっているブータン研究の相互連携を図るために連絡会を構成し HP やデータベースやアーカイブスの作製をする。②派遣招聘:大学院生と学部生を中核に次世代のブータン研究者を涵養し京都大学らしいフィールド教育をおこなうための派遣事業をする。実践編として「地域の伝統を活かした高齢者検診システム」を開発中のフィールド医学や、人間とそれ以外の動物の共生を探る霊長類学・野生保全管理学や、東部ブータンへ展開している教育学や、防災科学の現地調査隊に同行する学生や教職員の派遣をおこなう。逆に、ブータンから招聘・来学する者の窓口となる。③京都大学として眼に見える社会貢献・アウトリーチ活動をするために、メディアと連携した展示会などをおこなう。なお、それらの活動の延長として、文部科学省の拠点形成経費や環境省の SATREPS 事業などの外部資金の獲得に向けたプロジェクトを形成する触媒の役割を果たす。

平成 24 年度は、京大ブータン友好プログラム事業の HP の英語版を充実して国際的な対応を進めた。さらに年 2 回の学生現地派遣事業をおこなった。本学の多様な構成員に広く門戸を開くために、常勤の教職員以外の構成員である学生・大学院生・研究員等も派遣した。そうした日々の蓄積の結果を眼に見えるかたちで結実させるものとして、平成 24 年度においては、本事業による成果報告を学術誌「ヒマラヤ学誌」面に掲載した

京都大学教育研究財団からは平成 24 年度の助成をいただいた。24 年度は 2 回の派遣と 2 回の招聘をしたが、そのうち第 9 次隊と第 10 次隊の学生等の渡航経費を財団からの助成でまかなった。合計 9 名である。以下の概要に下線を付した。

第 9 次訪問団、6 人、日程：2012 年 8 月 25 日から 2012 年 9 月 02 日。訪問団構成：山本真也・霊長研特定助教。大見士朗・防災研究所准教授。内田由紀子・こころの未来

特定准教授、西出俊・白眉特定助教、福島慎太郎・地球環境学堂・大学院博士3回生、地域研究、馬場悠介 工学研究科大学院修士1回生。概要として、ハ・プナカ・ワンデューポダン・ティンパー・パロを訪れた。主な訪問地のひとつであるハでは、授業見学をするとともに、生徒・教師・校長との対話・情報交換をおこなった。ハでは2011年9月に地震をうけた被災地の様子を視察した。ティンパーでは、王立ブータン研究所・地質鉱山局・王立自然保護協会・JICAを訪問し、それぞれの所長と会談・意見交換をおこなった。とくに王立ブータン研究所では、所長である Dasho Karma Ura 氏との対談を実現し、ブータンの国民総幸福・自然観・宗教観について貴重な話を聞くことができた。

第10次訪問団、12人、日程：2013年1月18日から2013年1月28日。訪問団構成

藤澤道子・東南アジア研究所特任助教、吉原博幸・医学研究科教授、坂本龍太・白眉センター助教、千石真理・こころの未来研究センター特定研究員、道和百合・医学研究科医員、須永恵美子・アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程5年、平田義弘・医学研究科・大学院生、加畑理咲子・医学部学部5回生、丸山晃央農学部学部4回生、谷悠一郎・農学部学部3回生、西垣昌代・宇治地区事務部総務課長。小野加奈子・医学部附属病院総務課広報企画掛 非常勤職員（病院長秘書）。サムテガンではキャンプまたは民家に宿泊し、地域の診療所(BHU)・患者宅訪問グループと村人と交流するグループに分かれて活動した。その他、テキ・アゴナ BHU、ポプジカ BHU 訪問、ワンディ県保健部長、ワンディ県知事との会談、保健省とのミーティングをおこなった。また、駆け足でティンパー、パロ、プナカをまわり、ポプジカでオグロヅルを観察した。

こうした派遣団において、学生たちが貴重な経験を積んだ。各訪問団の活動の詳細は、以下の HP で写真とともに公開されているので参照いただきたい。

HP: <http://www.kyoto-bhutan.org/>